

大蔵流虎明本における「申」系感動詞について

深津周太（名古屋大学大学院）

要 旨

対話劇のシナリオとして、他者への呼びかけに用いる感動詞が頻出する近世の狂言台本において、「申」系感動詞には特に多彩な形式が見られる。「申」系感動詞については通時的観点からの論考が多い。しかし、それぞれの形式の共時的段階における言語形式としての対立が看過され、社会的位相差を基準とした記述に留まるため、通時論においても説得的な説明に至っていない。本稿では、大蔵流狂言台本『虎明本』における「申」系感動詞を取り上げる。言語形式として統一できるものとそうでないものを整理し、それぞれ対立する形式に関しては場面的条件・待遇的条件を指標として、それらの使い分けの諸相を明らかにする。またその過程で、一般的な課題として、「日本語史における待遇表現研究に〈初対面か否か〉という条件を持ち込むことの必要性」、「畳語形感動詞と非畳語形感動詞は単なる表現的価値の差ではなく文法的価値の差を持つこと」を提示し、今後の発展の可能性を示す。本稿の整理は、それ自体を目的としたものというよりも、むしろ「申」系感動詞の構造的変容を考察する意味での通時研究への足がかりとなるものであり、「申」系感動詞の歴史的研究の端緒として位置づけられる。

1 はじめに

従来の日本語の歴史的研究において、感動詞そのものを論じた研究は少ない。感動詞が文献上にまとまった数をもって出現するのは、中世末から近世以降の口語資料を待たねばならない。また感動詞はその性質上、構文研究の対象とならない。感動詞の歴史的研究が多くを見ないのは、以上のような文献上・方法論上の制限が存することが主だった理由であろう。

その中で、特定の語の個別の変遷を辿る意味での通時の研究は、感動詞についても比較的なされてきている。しかし、現代語を除いて、特定の時代における感動詞をそれ自体静態的に捉えた研究は、河原（1996）の「呼びかけ表現¹」に関する論がある他は寡聞にして知らない。山崎（1963）では、近世初期の待遇表現の体系的な考察の一部として「感動詞の体系²」にも触れているが、これは感動詞そのものを記述することを目的としたものではなく、山崎（1963）で提唱される、人称に基づく待遇体系の論証に利用されたものであり、演繹的な方法によって分類がなされるにすぎない。ここで注意されるのは、両者が共通して、感動詞の中でも呼びかけの意味をもつものに対象をしぼっている点である。感動詞は一般的に、詠嘆を表すものと呼びかけや応答に用いるものに二別され、感動詞の歴史的研究は、後者を対象としたものが主である。

一方、感動詞の通時の研究の実践として、その対象とされる機会の多いものも、いずれも呼びかけに用いられる、動詞「申す」を起源とする「申^{もいし}」とそれに関連する感動詞（以下、「申」系感動詞とする）である。しかし、これらの研究も、歴史的観点からは説得的な説明が与えられているとはいえない。これは、従前の研究に厳密な共時的視点が欠けていることが原因であ

1 河原（1996）は「表現」と言いながら、実際にはほとんど語形式としての感動詞を対象としている。

2 山崎（1963）が扱うのは「呼掛の感動詞」。

る。その結果、通時的変遷の観察にあたって見落とされる問題が少なくない。

ある形式の歴史的变化を明らかにするにあたって、単にその変化の流れを事実として記述するだけではなく、その変化にどのような意味があるかを考えねばならないことは言うまでもない。したがって言語変化の説明には、変化が生じる要因と、その要因が適用される条件が共時的に備わっていることを明らかにすることが求められる。その意味で、通時の研究を行う前提として、まず共時態の精密な記述が理論的に不可欠である。

本稿では、中世後期から近世初期の口語を反映するとされる大蔵流の狂言台本『虎明本』³に見られる感動詞のうち、複数存在する「申」系感動詞の対立もしくは非対立を明らかにする。

2 従来の指摘と本稿の立場

先述のとおり、「申」系感動詞の通時的変容を考察するにあたって、そのアプローチとしては、まず各共時態におけるそれらの観察が不可欠である。言うまでもなく、ある形式の価値を決定するには、その形式と、それに関係する他形式との相対的関係を明らかにする必要がある。

「申」系感動詞が共時的に複数存在している以上、それらは何らかの価値の差を持つという仮説を立てることが許されよう。それらすべての形式が、同価値の形式として並存し、いかなる場面・相手に対しても任意に使用できるとは考えがたい。そのような余剰の形式がこれだけ集中しているのは、言語のシステムとしてきわめて不経済である。

もとより全ての形式が対立するとは限らない。通時的な流れのある一点において、同価値の形式が並存することは当然ありうることである。ここではどの形式同士がいかに異なり、どの形式同士が同じものとしてまとめられるかを問題とする。

他者への意図的な発言である呼びかけの感動詞については、特に待遇表現の視点から体系的な使い分けが存在することが夙に指摘されている。その実践としては先述の山崎（1963）がある。また山口（1984）は「感動詞の位相差」として、次のように述べる。

- (1) 感動詞、特に対人性の明らかな応答や呼掛けに用いられるそれには、相手に対する敬意や待遇意識の差によって、その相手にふさわしいものを使い分けなければならないという規範意識の対象になりやすい点がある。

もちろん、感動詞そのものの言語における位置付けはいかなるものか、などといった解決すべき根本的な問題は多い。しかし、呼びかけの感動詞を一つの共時態において眺望するにあたって、説明原理としての体系の有用性を否定することはできないであろう。よって本稿では、それぞれの形式を対立する形式によって支えられる相対的な価値を持つものとしてその分布を明らかにする。

3 場面による三分類

従前の研究において中・近世の研究として主眼におかれてきたのは、「申」と「物申^{ものまわし}」の関係についてであった。その背景は、通時的な過程として本来呼びかけの表現に用いられていた「物申」系の表現が訪問時の呼びかけ形式に固定化され、「申」がその他の場面における呼びかけの位置を占めるようになってきたという事情がある。これらの研究では、「シシ申^{ししまわし}」

³ テキストには北原保雄・池田廣司（1972, 1973, 1983）『大蔵流虎明本 狂言集の研究』上, 中, 下（表現社）と笹野堅編（1944）『古本能狂言集』1,2,3（岩波書店）を用いた。

「^{もうしもうし}申々」は、「申」の1用法として扱われ、その差異については用法レベルのニュアンス差の記述にとどまる。

3.1 「申」系感動詞の種類

まず、虎明本における「申」系感動詞にどのようなものがあるか、改めて確認しておきたい。本稿ではよく比較される「物申」と、それとほぼ同じように用いられる「^(あんないもい)案内申」も考察対象とし、関係を整理しておく。形態的な分類をすれば、以下のようなパターンが挙げられる。

表1 虎明本における「申」系感動詞

[申のみ]	申
[申×n]	申々、申々々
[非語彙的感動詞+申]	イヤ申、シシ申、シイシイ申
[語彙項目+申]	案内申、物申、イカニ申

以下に、それぞれの形式の用例を挙げる。

- (2) [申] 申たもんの仰られた事をきかせられたか (虎明本・鞍馬参)
- (3) [申々] 申々ふたりながらもどつてござる (虎明本・麻生)
- (4) [申々々] まーどおこさう、申々々 (虎明本・鞍馬参)
- (5) [イヤ申] いや申、いまいましひ事を仰らるゝ (虎明本・鬼瓦)
- (6) [シシ申] 是に言葉をかけう、シシ申 (虎明本・餅酒)
- (7) [シイシイ申] 言葉をかけう、しいしい申 (虎明本・秀句傘)
- (8) [イカニ申] いかに申、むこ殿のお出でござる (虎明本・岡太夫)
- (9) [案内申] あんなひ申 (虎明本・節分)
- (10) [物申] もの申、ござるか (虎明本・千鳥)

本稿は、これらの形式がどのように整理されるかを問題とするものである。ここでは全てを1単位とみなしてよいのか、「申」以外のものは2つの単位の連続としてそれぞれを記述すべきなのかを明らかにしなければならない。すなわち、まずは単位の確定が必要である。「イカニ申」については、「イカニ」の感動詞化⁴という面についても考察が必要であり、本稿では対象から外す。

これまでの研究では、[物申：それ以外]という理解しかなされていない。先に述べたように「物申」は「申」と比較して論ぜられる。照井(1983)は、前時代から呼びかけのことばとして広く用いられていた「物申さう」「物申さん」「物申さぶらはん」などの形から変化した「ものまう」を「取り次ぎを乞うことば」、室町時代から江戸時代にかけて見られるようになった「申」「シイシイ申」「申々」を「目の前にいる相手に呼びかける」ことばとして二分する。

前田(1985)は、中世に「申」「申々」の用例が多く使われ、「次第に「ものまう」の地位を奪ってゆく」とする。前田の指摘は、訪問時以外の呼びかけ領域を「申」「申々」が侵略し、「物申」は訪問時の呼びかけを担うようになったということである。

両者に一致するのは、[訪問時の取次ぎに用いる：眼前の相手に呼びかける]という区別で

⁴ 「イカニ」は『日本大文典』において「呼格」として挙げられている。

あり、これが今までになされている「申」系感動詞の使い分けの理解である。「申」「申々」「申々々」「シシ申」「シイシイ申」の違いには触れられることがなく、その価値の差は見過ごされてきている。

3.2 場面による分類

これまで「申」系感動詞は、＜訪問時か否か＞という場面差を尺度として、二元的な分類がなされている。演繹的にこのような分類を行うと、記述者によっていくらかでも分けられてしまい、その立て方は恣意的になる。例えば河原（1996）では、まず「呼びかけの表現」は「おおよその性質」として、「丁寧な言い方／普通の言い方／ぞんざいな言い方／古めかしい言い方」に4分類される。その上で、河原（1996）は「呼びかけの表現」が用いられる場面として、以下の6つを想定する。

- ① 他家を訪問して、玄関先で案内（取次ぎ）を請う場合
- ② 知人・縁者の家を訪問して、直接本人に呼びかける場合
- ③ 道中で見知らぬ人に呼びかける場合
- ④ 顔見知りの人に呼びかける場合
- ⑤ 話しているときに、ある事柄について注意を喚起する場合
 - a. 話しているときに、苛立ちをこめて説明したり叱りつけたりする場合
 - b. 話しているときに、念を押して命令する場合
 - c. 話しているときに、驚きや詠嘆を含んで訊き返す場合
- ⑥ 他所から帰参して、玄関先で呼びかける場合

ここでは、場面による分類と心理的な分類が混在している。「申」系感動詞の記述にあたっては、このような用法レベルの分類は必要ない。ひとまず「申」系感動詞の分類に必要な要因は、「申」系感動詞の用例そのものから帰納されるべきである。

場面差ということを考えてみる場合、呼びかけの行われる場面として客観的な判定が可能なのは、＜最初の呼びかけか否か＞という点であろう。この条件は、二元的に截然と区別することが可能であり、文献上の解釈も恣意的にならない点ですぐれている。この条件で分類すると、以下の通りである。

表2 <最初の呼びかけか否か＞という条件による分類

	申	申々	申々々	イヤ申	シイシイ申	シシ申	物申	案内申
最初	3	10	0	0	3	1	94	11
会話中	21	53	1	1	0	0	0	0

ここから、「シイシイ申」「シシ申」「物申」「案内申」の4形式が選択される場合には、＜最初の呼びかけ＞に用いるという場面的条件が積極的に関わることが分かる。

その中で、「物申」は先行研究の指摘どおり、他家への訪問時に用いられる形式であることを認めてよいであろう。用例数も非常に多く、現れる文脈はほぼ一定している。「案内申」も同様に見てよい。

(11) つくりこゑを致てよび出さう、もの申

(虎明本・呼声)

(12) やがてあんなひ申さう、ものまふ、あんなひ申

(虎明本・塗師)

ただしこの両者の関係をどう捉えるかも問題となろう。例えば次の例を参照されたい。ここでは、「物申」との発話を受けた太郎冠者は、それを「案内申」として受け取っている。

(13) (親)「物申

(太郎冠者)「案内まふとはたそ

(虎明本・二人袴)

これによれば、両形式は同じ意味を表す自由変異の関係にあることが疑われる。しかし「物申」は単独でも、「物申、案内申」「案内申、物申」というシンタグマティックな関係としても出現する。「案内申」は「物申」と同時にしか用いられないという制限がある。また両者が同時に出現する場合もある。

(14) やがてあんなひ申さう、ものまふ、あんなひ申

(虎明本・塗師)

(15) やがて案内を申さう、あんない申、ものまふ

(虎明本・賽の目)

すなわち、「物申」「物申、案内申」「案内申、物申」の3パターンが存在するが、本稿では「物申—案内申」ではなく、これら出現しうるパターン全てを自由変異の関係にあると考えておきたい。

3.2.1 シシ申

他方、「シイシイ申」「シシ申」も特定の文脈に用いられていることがわかる。

(16) 是へわつはと申て参程に、つれがあまたあるかとぞんずれば只一人じや、是に言葉をかけう、しゝ申

(虎明本・餅酒)

(17) 是へわつはと申て参る程に、つれがあるかとぞんじたれば只一人じや、是はよささうな者じやほどに、是に声をかけて見う、しい／＼申

(虎明本・鼻取相撲)

(18) 是へ参る者は、一段よささふなものじや、言葉をかけう、しい／＼申

(虎明本・秀句傘)

(19) 是へーだんの物が参る、ことばをかけう、しい／＼申 [ナウ／＼トモ云]

(虎明本・昆布売)

「シイシイ申」「シシ申」は、道中で初めて声をかける場合に用いることが分かる。このように両形式は同じ文脈で用いられ、形態的にも類似していることから、自由変異と考えることが許されよう。虎明本には、「シイシイ」は非語彙的感動詞として存在しているが、「シシ」はない。

(20) しい／＼、きゝまらする

(虎明本・鼻取相撲)

(21) ざこばかりじや、しい／＼とまり／＼をながめつ

(虎明本・名取川)

もとより「シイシイ申」の「シイシイ」が、(20)(21)に挙げた「シイシイ」と通時的に連続するものと言いつてはできない。共時的研究においては、その語の出自を考慮に入れることは避けるべきであるから、<シイシイ：シシ>の対立がないことを、<シイシイ申：シシ申>の対立を述べる上での根拠とするのは妥当でない。

しかし、場合によっては通時的な事情を援用することで合理的に説明がつくこともある。虎寛本では同文脈ではすべて「シシ申」となっている。

(22) あれへ鄙者と見えて、何やらわつぱと申。ちと当て見うと存る。なう／＼、しゝ申

(虎寛本・末広がり)

(23) (淡路) イヤ、是へも似合しいものが参る。詞をかけませう。(尾張) 夫が能う御さ

らう。(淡路) なう／＼、しゝ申

(虎寛本・三人夫)

(24) (立頭) とふて見ませう。(立衆一) 夫が、(立衆) 能う御ざらう。(立頭) イヤなう
 △、しゝ申 (虎寛本・米市)

ここから想定できるのは、「シイシイ」と「申」が複合語化することと影響しあい、形態が縮まることによって、一語としてまとまったことを示すものではないかということである。虎明本で両形式が見られるのは、「シイシイ」>「シシ申」へと語形を変える通時的現象の一面を示すと考えられる⁵。このような仮説を立てれば、上に述べたように非語彙的感動詞「シシ」が虎明本には存在しないという共時的事実も、これに矛盾しないという点で、消極的とはいえ意味付けを得られるであろう。

以上のように、「シイシイ申(シシ申)」は、独自の領域を持つ1つの単位として考えることが可能であり、「申」の1用法としてではなく、それとは独立した異なる語形式といえよう。以下これらをまとめて「シシ申」と表記する。

「シイシイ申」と「シシ申」の違いが表記のゆれであった可能性も否定できない⁶が、その場合も、いずれにせよ両者は同じ単位として認めることとなる。また、これらが表記上の問題であったとしても、固定的文脈に用いられることに変わりはない。「シシ申」が「申」とは独立した単位である可能性は依然高いと思う。いずれにせよ、特別な意味を担うこの形式を、1つの語形式として見なすことに問題はあまい。

3.2.2 「申」「申々」「イヤ申」

表2より、「申」「申々」は圧倒的に会話中の呼びかけが多く、「イヤ申」も会話中のみの使用である。「申」「イヤ申」は「物申」「シシ申」と同じ文脈に用いられることがない。

さて、同様の理屈で考えると、「申」と「イヤ申」は1つの単位としてまとめられるのではないか。「イヤ申」は「イヤ」が前接することで「申」と意味が変わらない。

(25) いや申、いまいましひ事を仰らるゝ (虎明本・鬼瓦)

これは間投詞「イヤ」が文頭に現れているにすぎず、「申」に直接的な意味の関与はないものと考えられる。よってこの例は「申」の1例に数えるのが妥当であろう。河原(1996)は、

(26) 「いや」「いかに」という感動詞を添えることによって、相手に自分の意思を伝えようとするときに切り出す丁寧な言い方になっている

とするが、(25)のような「いまいましひ事を仰らるゝ」という不平を述べる場面に、他の場面で用いられる「申」より丁寧な言い方をすると考えられない。

このように「シイシイ申」「イヤ申」は、より抽象的な段階では、一見[非語彙的感動詞+申]という形態上の一致を見せるが、単位としての価値がまったく異なることを理解しておく必要がある。「シシ申」は1つの語形式、「イヤ申」は2つの語形式が隣接して出現しているにすぎない。

以上見てきたところから、「申」は「物申」「シイシイ申」とは用いられる場面によってパラレルな関係にあるといえる。しかし、会話中呼びかけが圧倒的に多い点では「申」と同じ傾向を示す「申々」は、「シイシイ申」と同文脈で用いられることがある。

(27) 是へ一段のつれがまいる、言葉をかけう、申△ (虎明本・此耕)

(28) 是へけうがつつた者がまいるほどに、言葉をかけてみう、申△ (虎明本・蚊相撲)

⁵ なお、虎寛本で「シシ申」に「ナウ△」が必ず前接するが、このことは本稿では詳しく扱わない。

⁶ 狂言台本には応答の「は」と「はあ」などの表記にもゆれが見られる。

(29) 言葉をかけてみよう, 申△△ (虎明本・右流左止)

(30) よひつれじや程に言葉をかけよう, 申△△ (虎明本・宗論)

ここからは「申」と「申々」との違いも窺える。「シシ申」とはパラレルな関係にある「申」に対し、「申」と同じようにも用い、「シシ申」と同じ用法も持つ。ここから「申々」は、相対的に汎用性をもつ形式であったことが想像できる。

なお、1例のみ見られる「申々々」であるが、これは「申」を3度繰り返したものと見てよいのではないか。例数の点からも、積極的に1単位の形式とみなすことはできない。

(31) まーどおこさう, 申々々 (虎明本・鞍馬参)

3.3 場面的条件による整理

本節では場面差という観点から「申」系呼びかけの使い分けの諸相を見てきた。その結果、従来の研究において一つにまとめられて捉えられてきたものが、それぞれ機能的差異を持ち、大きく3類に帰納されることを明らかにした。河原(1996)のように演繹的なスケール設定は客観性・統一性・簡潔性を欠くと言わざるをえない⁷。本節で述べてきたことを以下にまとめる。

(32) 「シイシイ申」と「シシ申」は同じ単位と考えるのが妥当である。そのように考える限りでは、さらにこれらを1つの語形式(少なくとも一語相当の価値を持つもの)として、「申」とは異なる単位であるとみなすべきである。

(33) 「イヤ申」の「イヤ」は、「申」と複合することで新たな機能を生じさせるものではなく、間投詞「イヤ」が偶々「申」に隣接して出現しているにすぎない。よってこれは「申」に入れるのが妥当であると判断した。

(34) 「申」系感動詞は、場面差を基準として、会話中の呼びかけ(「申」)と最初の呼びかけに分けられ、後者はさらに訪問時の呼びかけ(「物申」「案内申」と、道中での呼びかけ(「シシ申」)に帰納分類される。これらは排他的で、相互に交替不可のパラレルな関係にある。しかし「申々」は会話中呼びかけと道中でのあいさつの呼びかけにまたがって用いられる。

(32), (33)の整理を踏まえて、(34)に示したような分類を図にすると、以下のようになる。

図1

会話中の呼びかけ	最初の呼びかけ	
申	道中	訪問時
	シシ申	物申
申々	案内申	

このように3つのタイプ(と汎用性の高い「申々」)に抽象しうる。分布の異なりから、一応全ての単位を違うものとして捉えることができるため、「申」系感動詞の記述それ自体としては、これ以上の細分化はひとまず必要ないであろう。

⁷ 河原(1996)はより広い範囲で行っているため、分類の数が多いのは当然であるが、問題は分類の内容そのものではなく、方法論に属するものである。

4 「シシ申」への精確な理解

さて、3節では場面差という点において「申」「申々」「しいしい申」「物申／案内申」はそれぞれ異なる機能を持つことを明らかにしたが、次に、各形式の機能についてより精確に規定するために「待遇」の点に注目する。特に本節では、「シシ申」について詳しく述べる。

特に歴史的研究の分野において、従来の研究は身分的上下関係に偏向している。例えば、本稿と同じく狂言資料を対象として二人称代名詞を待遇の面から扱った林（2005）が、「狂言における人間関係はほぼ身分関係にあたる」ことを前提としているように、待遇の問題は、身分的上下関係の視点から説明が試みられることが多い。確かに客観性の高い身分的上下関係を待遇の指標とすることは誤りではない。しかしそれに偏向しすぎることで、見落とされる問題があることにも注意したい。

ところで待遇には身分的上下関係といった固定的要因のみならず、心理的条件のような浮動的な要因も関わることは、おそらく誰もが認めることであろうが、それを説明原理として導入することの困難もまた認めざるを得ない。本論では客観的指標にのみ重点を置くことにする。ただしこれは心理的条件を軽視するものではなく、より確実なものを順序として先に扱うに過ぎない。

4.1 <初対面か否か>という要因

身分関係を指標に「申」と「シシ申」を比較すると、以下のようなになる。この場合、主従関係などの確例に頼らざるを得ず、さらにそれも恣意的になる可能性がある。次の表3の数値は確例のみを取り上げたものである。

表 3

	申	シシ申
上位→下位の呼びかけ	0	1
対等の相手への呼びかけ	0	3
下位→上位の呼びかけ	16	0

この表に示されるような身分関係の点からみると、明らかに上位待遇に用いられる「申」に対し、「シシ申」は次の(35)のように定義することができよう。

(35) 最初のあいさつに用いられる敬意の低い呼びかけ。

「申」の通時的変遷を追った宮澤（2003）はこのような面を捉え、「シシ申」の待遇価値について以下のように述べている。

(36) 「しいしい」とは騒ぎを制止する時や邪魔者を追い払う時に用いる語である、大名から昆布売、加賀の百姓から越前の百姓、太郎冠者から新座の者へ呼びかけているものであり、呼びかける側は同じ身分の者、またそれ以上の者であった。あまり敬意が含まれていないと判断できる（傍点は引用者による）

宮澤（2003）は、場面による両者の差という観点が欠けており、そのため「申」との比較で「シシ申」を捉えているのであろうが、それはそれとして、たしかにこの数値を見れば待遇価値として適切な判定にも思える。しかし、異なる側面から見れば、必ずしもそうはいえない。本稿では、ここでもやはり客観的・二元的に分類できる指標として、<初対面か否か>という

要因を考える。この要因に沿って、まとめ直した形式を分類すると、次のようになる。

表 4

	申	しいしい申
初対面の相手への呼びかけ	6	4
知合いへの呼びかけ	18	0

ここでも「シシ申」に注目されたい。初対面の相手にしか用いられていないことがわかる。すなわち「シシ申」の選択には、絶対的条件として<初対面の相手に対して>という条件が加わることを理解しておかねばならない。3で「シシ申」には「最初の呼びかけに用いる」という条件が選択に関わることを述べたが、それを踏まえて、「シシ申」は以下のように定義しなおすべきである。

(37) 初対面の相手に対して用いられる最初の呼びかけ。

ここでは<初対面か否か>という待遇要因を想定することで、「シシ申」自体の性質を、より精密に捉えることができた。なお、「申々」のあいさつの用法も、いずれも「初対面の相手」に対しての使用であり、この定義にも適合する。したがって「申々」の一部は、やはり「シシ申」と同価値を有することになる。

以上に述べたように、身分関係の点から「シシ申」には「あまり敬意が含まれていない」という宮澤（2003）の指摘は必ずしも正鵠を射ているとはいえない。ここで述べるのは「申」との相対的価値としての「シシ申」の価値ではない。そもそも両者は用いられる場面そのものが異なる平行な関係にあるのであって、待遇面から比較されるべき形式同士ではない。したがって「シシ申」それ自体として「あまり敬意が含まれていない」と判定するのは不適切であるということである。

4.2 待遇研究への寄与として

以上の議論は、<初対面か否か>という要因を、日本語史における待遇表現研究に持ち込むことの必要性を示唆するものでもある。待遇表現の歴史的研究について今後の指針を提示したものに、永田（2005）がある。以下に引用する。

(38) 話し手と聞き手と話題の人物との上下関係、親疎関係等の社会的関係が、各時代において、何が重要な属性として機能しているかという社会言語学的な視点を持つ研究が待遇表現の歴史的研究として必要・・・(略)。

先に挙げた林（2005）は、先述の通り「狂言における人間関係はほぼ身分関係にあたる」という前提からスタートするが、考察を進める中で方法論上の限界を認めている。

(39) 人間関係では上下の身分関係を中心に見たが、待遇表現は固定した上下関係だけでは納まりきれないものがあり、場面の展開によって微妙に変化するものであることが分かった。

必要なのは「場面の展開によって微妙に変化する」要因を明らかにすることであり、それによって新たに待遇を扱うためのスケールの構築を試みるべきである。本稿は、その1つのケースとして、<初対面か否か>という要因の導入の必要性を論じた。

5 申々について

4では、従来の身分的上下関係に偏向した待遇の捉え方を疑問視し、〈初対面か否か〉という新たな要因を導入することで、「シシ申」の性質をより精確に記述することができた。

しかし、一方で話し手と聞き手の身分的關係が重要な要因であることもまた事実であるといえよう。ただし本稿では、これを〈上位一下位〉に単純に分けるのではなく、この関係をより精密に見ていくことで、これまで見過ごされてきた事実を明らかにする。ここではやや焦点を絞って、特に問題となる「申々」をトピックとして取り上げておく。まず、「申」「申々」全例の、話し手・聞き手の関係を示す。

表5

	申	申々		申	申々
冠者→主(大名・果報者)	11	18	男→女		2
掬→男	1	1	掬→仲人		2
下人→大原女	1	1	太郎冠者→女		1
太郎→若い衆	2		新座の者→太郎冠者		1
妻→師匠	1		三位→年寄		1
新発意→住持	1		掬→船頭		1
出家→夫	1		猿引→大名		1
法華僧→亭主	1		亭主→冠者		1
ばくち打→何某	1		太郎→祖父		1
告げ手→夫	1		山伏→祖父		1
所の者二→所の者一	1		太郎冠者→客人		1
何某→若者一	1		所の者一→出家		1
雑領の者→大名	1		出家→名取の何某		1
出家→亭主		4	夫→出家		1
有徳人→ばくち打ち		2	住持→檀家		1
女→ばくち打ち		2	伯養→貸手		1
饅頭売→大名		2	匂当→貸手		1
男→人形		2	法華僧→浄土僧		1
妻→夫		1	所の者→何某		1
甥→伯母		1	亭主→三位		1
孫→祖父		1	大名→入間		1
浅鍋売→目代		1	仲裁人→主		1
羯鼓売→目代		1	津の国→播磨		1
奥筑紫→奏者		1	太郎冠者→蚊の精		1

一部を除き、かなり相補的な分布を見せるが、これは用例数の少なさが多分に関係していると考えられる。それぞれ1例ずつしか見られない以上、これらを即座に相補分布とみなすこと

は慎みたい。ここでは問題を絞って述べることにする。

まず、表の中で太枠に囲んだ〈浅鍋売→目代〉〈鞆鼓売→目代〉の関係を見る。これは人間関係として〈被仲裁人→仲裁人〉に抽象化しうる。この関係では「申々」のみが用いられ、「申」が用いられない。ここで注目したいのは、同じく疊語・非疊語関係にある「ヤイ」「ヤイヤイ」においても、同じような傾向が見られる点である。つまり〈仲裁人→被仲裁人〉の関係では、いずれも「ヤイヤイ」が用いられ(7例)、「ヤイ」が用いられない(0例)という事実が見られる。

- (40) 申△△、これへもつてまいつたかつこは、そさうなで御ざる
(虎明本・鍋八撥／鞆鼓売→目代)
- (41) 申△△
(虎明本・鍋八撥／浅鍋売→目代)
- (42) やい△△此めでたひ市のはじめに、何とてわつはと申ぞ
(虎明本・牛馬／目代→牛博勞・馬博勞)
- (43) やい△△汝は、めでたい市のはじめに何事をわつはといふぞ
(虎明本・鍋八撥／目代→鞆鼓売・浅鍋売)

同じようなことは、〈奥筑紫→奏者〉にもいえる。この関係は、〈百姓→奏者〉と抽象化できる。〈百姓→奏者〉は、「申」0例、「申々」は〈奥筑紫→奏者〉の1例しか見られないが、逆の〈奏者→百姓〉では、「ヤイ」0例、「ヤイヤイ」9例と顕著な数字を見せる。

- (44) やい△△汝はそこつな者じや、どこからまいつたぞ (虎明本・餅酒／奏者→越前)
- (45) やい△△三ヶ国のお百姓是へまいれ (虎明本・三人夫／奏者→淡路・尾張・美濃)

さらに、〈妻→夫〉〈甥→伯母〉〈孫→祖父〉について述べる。これらの計3例は夫婦・親族関係にあり〈身内〉として抽象化することができよう。〈身内〉関係では、「ヤイ」を用いず「ヤイヤイ」が3例用いられる。

- (46) 申△△はや此所で御ざある (虎明本・薬水／孫二→祖父)
- (47) 申△△只今申さうと存てわすれてござる (虎明本・伯母が酒／甥→伯母)
- (48) やい△△おぬし達は、此所じやといふに、景気の見事なも道理じや
(虎明本・薬水／祖父→孫)
- (49) やい△△皆々山へ行ものもあらはつれふ (虎明本・腹不切／夫→妻)

上に述べたことを表で示すと、以下ようになる。「申／申々」:「ヤイ／ヤイヤイ」の使用が、シンメトリカルな対応を見せている。

表 6

	申	申々	ヤイ	ヤイヤイ
商人—目代	0	2	0	7
奏者—百姓	0	1	0	9
身内	0	3	0	3

以上述べたように、「申々」には独自の領域が存在する。よってこれは「申、申」という単に「申」を連続させた二つの単位ではなく、一つの語形式「申々」としてと認めうる。よって、

- (50) 「申々」は「申」を重ねた形で、「申」よりも念を押した言い方になる。

と、ニュアンスの違いとしてこれを位置付ける河原(1996)の説明は当たらない。これは文

脈レベルの指摘に過ぎず、個別の用例を演繹的に分類した結果生じた誤認である。

「申々」は「シシ申」と同じようにも用いられ、また「申」とも同様に用いられる。その一方で「申」には見られない独自の領域を担うという面もある。ここからは、「申々」という形式の汎用性の高さが窺える。

この問題は、「ヤイヤイ」との関係も考慮すると、次のような問題の一般化につながる。

(51) 疊語形と非疊語形は、単なる表現的価値の差ではなく文法的な価値の差をもつ。

疊語形と非疊語形全般の具体的考察は、稿を改めることとしたい。

6 おわりに

本稿では、「物申」:「申／申々／しいしい申」という二分類が従来の見解であった場面による分類を、<最初の呼びかけか否か>という二元的条件を基に分類し直した。この条件によって分類されたもののうち、<最初の呼びかけ>は、更に<訪問時の呼びかけ>と<道中での呼びかけ>に分類がすることが可能であった。それにより使用差に関係する場面が3つに帰納され、「申」系感動詞を「申／物申／シシ申」という3分類で捉え直すことができた。それぞれは場面によって平行して使用され、相互に対立する形式ではない。また、「申々」については、<会話中の呼びかけ>と<道中での呼びかけ>に用いられ、その汎用性が明らかとなった。待遇面での条件としては、<初対面か否か>という要因が関わることを指摘した。この条件により、「シシ申」の機能をより緻密に捉えることが可能となる。また、疊語形と非疊語形の価値の差という点に言及した。

本稿で明らかにした共時論的事実は、あくまで一定の段階におけるそれぞれの語の対立がどうあるかという観察にすぎず、その構造がどのように形成されてきたかについては、関与しない。それは通時論の問題に属する。「申」を基として他の形式が生じたとするならば、その変化の実態と、背後にある変化を許す環境の考察が必要である。さらに虎明本以降の「申」系感動詞の構造的変遷の過程を探ることが、今後の課題となる。

参考文献

- 河原修一(1996)「室町時代談話語の研究(Ⅱ)―呼びかけの表現―」『島根女子短期大学紀要』第34号
- 照井寛子(1983)「もしもし」『講座日本語の語彙 第11巻 語誌Ⅲ できる～わんぱく』明治書院
- 林弘子(2005)「天理図書館蔵『狂言六義』の二人称代名詞から見た待遇表現」『国語国文論集』第35号 安田女子大学日本文学会国語国文論集編集室
- 前田富祺(1985)「あいさつ言葉の歴史」『日本語学』第34号
- 宮澤依江(2003)「呼びかけ語「もしもし」の史的変遷」『成蹊国文』第35号 成蹊大学文学部編
- 山口堯二(1984)「感動詞・間投詞・応答詞」鈴木一彦・林巨樹編『研究資料日本文法第4巻 修飾句・独立句編 副詞・連体詞・接続詞・感動詞』明治書院
- 山崎久之(1963)『国語待遇表現体系の歴史』武蔵野書院